

ジグゾー法を用いた自校教育の試み 1

—初年次教育科目「実践入門セミナー」における取り組み—

Teaching a college's founding history using Jigsaw learning technique
—an attempt at a women's junior college in Tokyo

OTSUKA, Misa

大塚みさ

日本語コミュニケーション学科教授

MITA, Kaoru

三田 薫

英語コミュニケーション学科教授

抄録：

この20年の間に自校教育の導入が各大学で進められてきた。本学でも2009年の「実践入門セミナー」開講以来これをシラバスに明記して取り組んできた。しかしながら、限られた授業時間で効果的な自校教育を実践することは容易ではなく、その場では理解や関心を示しても定着は見られない点が課題であった。この状況を改善してより効果的な自校教育を実践するために、筆者らはそれぞれの担当クラスで先行研究をもとにアクティブラーニングの一手法である「ジグゾー法」の導入を試みた。本稿ではその取り組みと今後の課題を報告する。

Abstract：

To teach the school's founding histories, the course "Jissen Introductory Seminar" has included it in the syllabus since 2009. However, results at the end of term have shown that the time allocated was insufficient. The students showed interest in the history and founder's life initially but did not seem to gain further understanding at the end of term. To address this and promote effective education of our school's foundation, we introduced the Jigsaw learning technique course, one of the Active Learning techniques. We tried it while referring to a previous attempt at a university in Japan. The results are reported.

キーワード：自校教育、初年次教育、短期大学、ジグゾー法、ループリック

keywords : Teaching a college's founding history, Freshman education, Junior college, Jigsaw learning technique, Rubrics

1. はじめに

「自校教育」とは文字通り学生にとっての自校（所属大学）の建学の精神、歴史あるいは社会における位置づけや役割をはじめとする様々な特性を伝授する教育を指す。重点の置かれ方は個々に異なるが、大学名や大学創立者の前を使って「〇〇学（への招待）」「〇〇道」などとして初年次教育の一環で実施する大学が多く見られる。

本学における取り組みは、大学プレスセンター（2018）に報告されるとおり伝記漫画『きりりうたこ』の入学生への配布、初年次教育における「学祖の生き方」「学園の成り立ち」の学び、「学長と行く、学祖故郷の旅」など幅広く行われている。特に初年次教育のうち1年前期に設置された「実践入門セミナー」の講義概要には、「学園創始者に学ぶ」（短期大学部）、「自校教育—『実践』を知ろう」（大学）が明記されている。しかし具体的な授業内容は統一されておらず、学園創立百周年を記念して制作した動画の鑑賞や講話などを通して、各教員が工夫を凝らして取り組んでいるのが現状であった。例えば英語コミュニケーション学科では学祖の欧米視察に至る経緯やイギリス滞在中の出来事を丁寧に説明する講義を実施しており、学生たちの感想シートからはそれが十分に興味・関心を高めるものであったことが察せられた。しかしながら学期末に実施した当該科目の自己評価ループリックの結果には期待したほどの伸びが見られず、自校教育方法の改善が必要であることが痛感された。

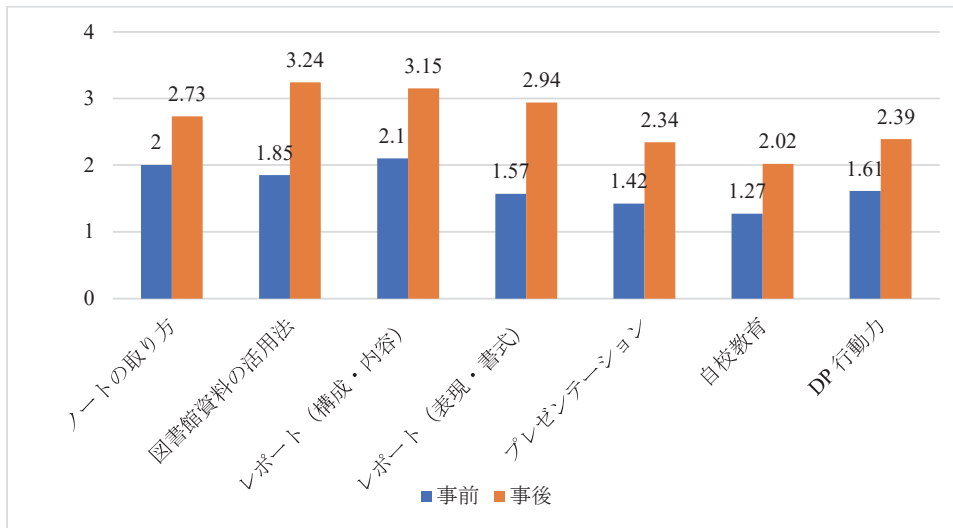
本稿では、こうした状況下で試行錯誤を重ねてきた筆者らが2019年度前期に行った取り組みについて、その成果と今後の課題を報告する。

2. 背景

ここで、今回の取り組みに至った経緯を簡単に報告しておきたい。筆者らは2016年度より科目ごとの自己評価ループリックの開発と導入¹に取り組み、特に大学・短期大学部共通必修科目である「実践入門セミナー」については、短期大学部2学科と大学食生活科学科の結果を比較して授業改善を重ねてきた。ノートテイキング、図書館資料の利用、レポート作成、プレゼンテーション等のほか「自校教育」を評価観点として事前（初回授業）と事後（最終回授業）とで5段階の自己評価を行わせたが、他の観点と比べて「自校教育」の伸びが鈍く、2017年度の調査結果では授業最終回にレベル1と回答した学生が3クラス合計62名中20名と全体の約3分の1にも及んだ。

しかし、中には事後の「自校教育」をレベル5と自己評価した学生が1名いた。食生活科学科のその学生はプレゼンテーションのテーマに学祖の生誕地の食などを取り上げていたことから、学祖について学生自らが主体的に学ぶ機会を設けることの必要性が示唆された（大塚他 2018）。

図 2.1-1 「実践入門セミナー」(3 クラスの結果統合、大塚・白尾・三田 2018)



そして翌 2018 年度前期はその点を重視してさらなる試行錯誤を重ねてきた。

このような中で、筆者らは 2018 年 8 月 SPOD フォーラム²にてワークショップ「グループワークで学ぶ自校の歴史—『香川大学検定³』を例に」を受講し、講師山本珠美氏が実践するグループワーク式の自校教育の取り組みを体験する機会を得た。

実際に行われているその授業内容について、葛城他(2012)の山本氏執筆部分から抜粋して紹介しよう。

- 7～8 名が 1 グループとなり、プレゼンターやコメンター役の役割分担を行う。プレゼンターは教員から事前に指定されたテーマ(「保井コノ—偉大な先輩(女性編)」「香川大学図書館と神原文庫」等)についてテレビの情報バラエティ番組をイメージして、1 人あたり 3 分間のプレゼンテーションを行う。
- 発表に際して A4 サイズのフリップを最低 3 枚用意する。
- プレゼンテーションの準備には山本氏らが作成した『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』の該当箇所を参照させて、ヒントと指示を与える。

筆者らもワークショップ参加中にこの課題に取り組むこととなり、学祖下田歌子の生誕から学園の創設を含むさまざまな業績をもとに、学生の役割分担を想定してみた。それに対して講師から、香川大学のような国立大学に比べ、創設者の志により誕生した私立大学では自校教育や「検定」の導入がより容易に行えるのではないかと助言を得た。

そこで著者らは翌 2019 年度の「実践入門セミナー」においてこの取り組みを試みることを決め、情報交換を行いながら各自が工夫を凝らして授業に導入することとした。なお、以下については統一を図った。

- 3～5名程度のグループワークとする。
- グループ内での発表は、1人あたり A3 サイズのコピー用紙をフリップとして用いることとする。
- 漫画『きらりうたこ』や公式ウェブサイト（「歌子小伝」）を活用させる。
- 「香川大学検定」に倣って「下田歌子検定」の作成を試みる。

以下の3章では大塚の、4章では三田の本年度の取り組みとその考察をまとめて示し、両者による取り組みから得られた成果や今後の課題を5章に集約する

3. 日本語コミュニケーション学科（大塚クラス）での試み

3.1 概要

本取り組みの導入として、ゴールデンウィークの宿題に漫画『きらりうたこ』を熟読する課題を出した。その上で、グループ分けを行い、プレゼンテーションの準備に当たさせた。当該授業ではレポート作成技法の習得に多くの時間を割いており、授業外の課題も少なくない。そこで極力学生が負担を感じないように、毎授業の最後の短時間をミーティングに当てて進捗を確認するなど配慮した。具体的なスケジュールは以下の通りである。

第2回授業（4月22日）GW中の課題図書（『きらりうたこ』）指示

第4回授業（5月13日）グループおよび作業分担と担当者決定、作業開始

第5回授業（5月20日）資料を持ち寄り、下書き作成

第6回授業（5月27日）グループ内発表会と小テスト

第7回授業（6月3日）フリップ画像をもとにした PowerPoint スライドによるクラス内発表会と投票

第8回授業（6月10日）最優秀グループ発表会

3.2 各グループの発表と効果

26名の履修者が3～5名の計6グループに編成された。その多くは漫画や Web サイト「歌子小伝」をもとに学祖の生い立ちから学園創立、その後の活動をまとめた年譜風の構成であったが、それぞれが工夫を凝らしてイラストを添えたりカラフルに彩ったりするものが見られた。

以下是最優秀グループ（5名）のプレゼンテーション構成である。

「歌子の生い立ち」（年譜による学祖の一生）

「下田歌子先生はなぜ女学校を開校しようと思ったか。その過程」（桃夭学校→華族女学校→欧米視察→実践女学校）

「教育活動」（学祖が行った教育活動全般）

「歌子について—和歌・服飾—」（学祖の和歌とその解釈、実践女学校の半纏、制服）

「歌子と音楽」（旧校歌に込めた学祖の思い・良妻賢母調の旧校歌から世界へ視野を向ける新

校歌へ)

このグループは、渋谷キャンパス内の香雪記念資料館へ足を運んで資料収集を行った上で、5名それぞれが関心を持ったテーマを掘り下げて発表した。その結果、他のグループとは異なった視点から学祖と学園をとらえることができたと思われる。

発表を聞いた感想をいくつか紹介しておこう。(一部修正・抜粋)

「下田歌子先生についてさらに理解を深められた」

「色々な時期の歌子先生について理解できたので良かった」

「知らなかった歌子先生の話が聞けて、驚く発見が多くて面白かった」

「自分の担当してないところも詳しくすることができてよかった」

「歌子先生のドレス姿と和服姿の絵が書いてあるフリップがとても良いと思った」

「(他のグループの発表は) 内容も充実していて面白かった」

3.3 歌子・実践検定作成の試み

香川大学検定に倣って、検定問題を作成する取り組みを以下の2段階で行った。

1回目(5月末)には、自分の担当部分からのテスト問題を考える課題を与えた。しかしこれをもとに10題から成る紙媒体のテストを作成して出題したところ、自分の担当外の問題や、学祖の幼名などを書かせる問題は正答率が低かった。

2回目(8月上旬)は、期末課題の1つとして「歌子検定」応用編問題作成(または下田歌子賞への応募)を課した。

これらの一部を以下に紹介する。(学生の出した回答に沿って学祖名を「歌子先生」とする。)

1回目(基本編)

- 歌子先生の生誕年、幼少期の名前
- 実践女学校の創立年、設立の目的
- 欧米教育視察の行き先

2回目(応用編)

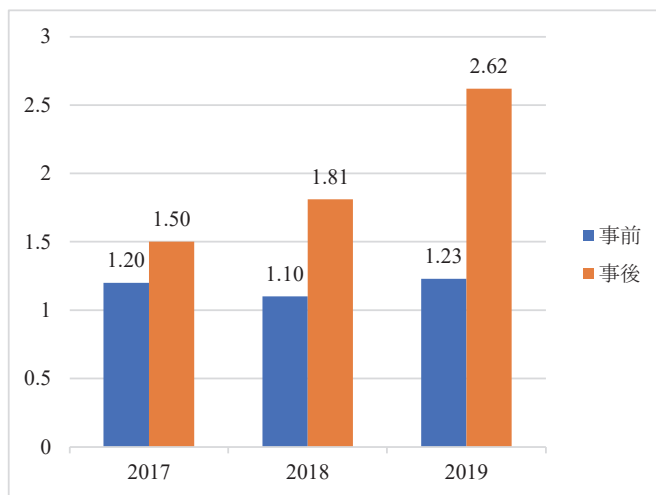
- 1893年に執筆、刊行された教科書の題名
- 歌子先生が考案した女学校の制服の名前
- 歌子先生の和歌の師の名前
- 歌子先生の和歌や遺したことばの穴埋め問題

当初の予定では、これらをもとに検定問題を作成したり、LMS(manaba)の小テストとして解答させるつもりであったが、授業時間の関係で実施には至らなかった。

3.4 取り組みの成果

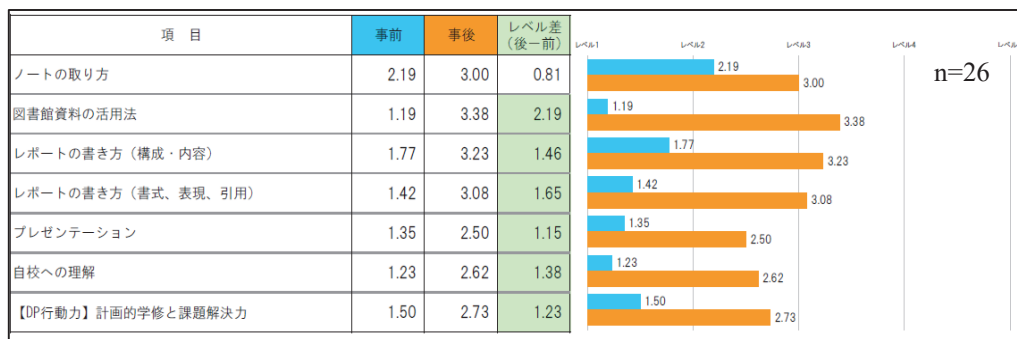
筆者担当の当該科目においてはレポート作成の比重が高く、完成後はそれを基にしたプレゼンテーションとディスカッションに焦点を移し、その後自校教育の話題に戻る余裕がなかったため、ルーブリック評価において高い定着度は期待できなかった。しかしながら、事前から事後への平均値の伸びは2017年度(0.30)、2018年度(0.71)を上回る1.40という結果となった。

図3.4-1 ルーブリックにおける「自校教育」平均値(事前-事後) 2017～2019年度



先述の通り、筆者らは2016年度より授業初回と最終回にルーブリックを用いた自己評価⁴を学生たちに課している。他の評価観点と比較すると上記の「自校教育」の値や伸び率はどのように位置づけられるであろうか。次の図を見てみよう。

図3.4-2 「実践入門セミナー」ルーブリック調査結果(2019年度前期)



(薄緑色のハイライト…事後-事前が1.0以上の項目)

図3.4-2に見られるように、「自校教育」は図書館資料の活用法、レポートの書き方(2種類)に次いで高い伸びを見せている。これは筆者のクラスが前期中にレポートを自力で作成できるようになることに重点を置いている点で合点がいく結果である。学生一人ひとりが自力でレ

ポートを書けるようになったことを実感することで各々の成長を自覚したと仮定するならば、同様の実感を得にくい「自校教育」でこれだけの伸びが見られた点は特筆できるものと言えよう。この点は、今後「歌子・実践検定」の取り組みを本格化させることでさらに改善が図れることが期待できる。

4. 英語コミュニケーション学科における取り組み（三田クラス）

4.1 これまでの経緯

2章で述べた経緯を踏まえ、2018年度は、講義を聞かせるだけではなく、学生グループで学祖について調べて発表する機会を授業の中で設けた。学生たちは3人グループで発表資料を制作・発表した。学生たちはパワーポイントで写真やイラスト、アニメーションを入れ、見やすい資料になるよう工夫していた。内容は、(1) 生い立ちからロンドン留学前までの主要な出来事、(2) ロンドン留学のきっかけからロンドン留学中、帰国直後の主要な出来事、(3) ロンドン留学後から晩年までの主要な活躍の3部分をグループ内で分担して作成させた。

この作業開始後、学科学生全員が聞く学祖欧米視察の講義が入るようにし、講義を参考にして発表に生かせるようスケジュールを組んだ。しかしジグゾー法ではないため、グループのメンバー同士で発表しあうという機会はなく、各グループがクラス全体に発表して終了となった。

4.2 2019年度の取り組み

2019年度授業では、新たにジグゾー法を取り入れた。同年度の授業では、入学時に学生全員に配られる創設者紹介漫画『きらりうたこ』を教材としてグループのメンバーで分担させ、4人グループで1学生1シートの紹介ポスターを、マジックを使って書かせた。翌週は、グループ内ではかのメンバーに向けて発表させた。3週目は、各学生の作成した手書きシートを写真に撮ってパワーポイントに貼り付けさせ、それを資料としてクラス全体の前で発表させた。

学生は、マジックで1シートに描ける範囲の課題であるため、強調したい内容を自由にイラストやカラーペンで表現しており、学生が何に関心があり、伝えたいと思っているのかがよくわかるシートとなっていた。パソコンソフトの使い方にまだ慣れていない学生でも、こうした表現方法の場合、気軽に短時間で取り組めて発表にこぎつけられる点がメリットであることが感じられた。

4.3 歌子・実践検定作成の試み

2019年度は翌年度以降の「歌子検定」導入の足掛かりとして、各学生に自分の担当部分に関係する選択問題を用意させた。それらの質問をクラス発表終了後に提出させ、重複する質問を除いた後の27問を学習管理システム（LMS）に打ち込んで、学期末に学生に受験させた。27問中24点以上を合格としたところ、受験者26名中21名が合格となった。こうして発表時期とずらして検定を受けさせることにより、自校教育の定着を試みた。

「歌子検定」が実施されるようになれば、それは、以下の点においてユニークな活動となる。第1に先輩の作成した検定問題の見直しや増強を図ることで先輩と後輩の「協働」作業となりうる点、第2に学科を超えた検定受験が可能であるため、短期大学部両学科の「協働」企画となりうる点である。「歌子検定」に関わることにより、学生は検定の「出題者」および「解答者」となり、自校教育がアクティブラーニングとなることが期待される。さらに「歌子検定」が何らかの形でイベント化され、文化祭などで来場者に紹介するなどの機会へと発展させていけば、学生の自校に対する理解を一層深められる可能性がある。

4.4 取り組みの成果

今回の活動を通して明らかになった課題は、学生にあまり大きな負荷をかけずに、しかも中身の濃い学びをさせることの難しさである。学生は、こなさなければならない課題が多数ある1年前期に自校教育を受けることになる。学生の負担を減らすため、参考資料は『きりりうたこ』を中心教材とすることとし、インターネットや図書館の資料を調べなくてもよいことにした。しかし漫画でカバーされる内容は自ずと制限されるため、インターネット中心に調べさせた2018年度の発表内容に比べて内容的に物足りないと感じさせるシートもあった。

そうした課題はあるものの、自校教育のジグソー法を用いた学習は、短大入学早々の発表の第1ステップにふさわしいものとなっていることがうかがえた。授業では、後半に別のテーマでパワーポイントを用いて発表することになるが、段階を踏んで繰り返し発表するということで、パソコン操作や人前での発表に不慣れだった学生が自信を付けていったことが、ループリックの結果や授業の感想コメントから読み取れた。図4.4-1は2017年度からの3年間の平均値の推移である。参考のため当該科目のループリック全体も示す(図4.4-2)

図4.4-1で見られるように、さまざまな取り組みを重ねることによって、事前から事後への伸び率は年々少しずつ高まっている。また図4.4-2は、「自校教育」が「図書館資料の活用法」に

図4.4-1 ループリックにおける「自校教育」平均値(事前-事後)2017～2019年度

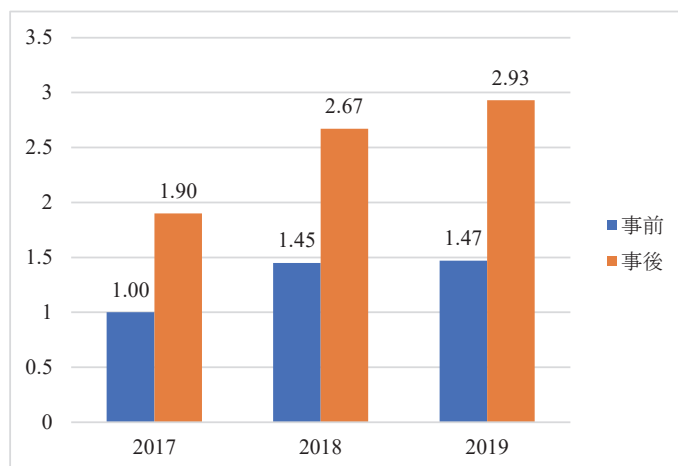
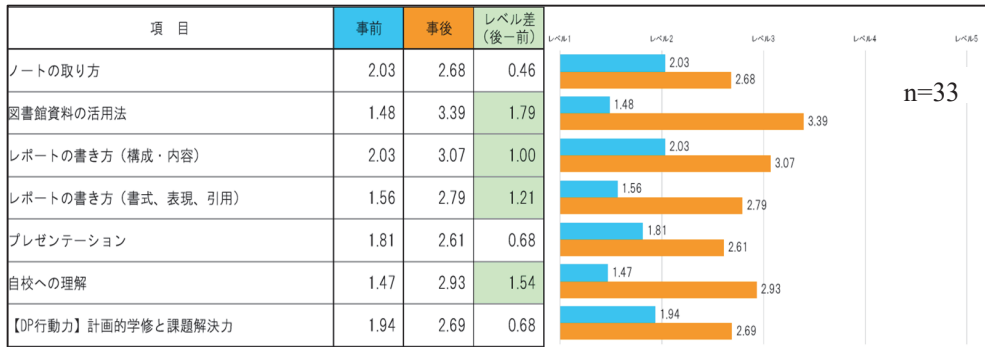


図 4.4-2 2019 年度「実践入門セミナー」ルーブリック（事前－事後）比較



（薄緑色のハイライト…事後－事前が1.0以上の項目）

次いで2番目に事前から事後への伸び率が高かったことを示している。

5. 今後の課題

3章、4章の考察をもとに、今後の課題として著者らの間で共通認識された点をまとめよう。

第一に、自校教育の実施時期と方法の問題が挙げられる。冒頭で述べたように、本学では1年次前期必修科目の「実践入門セミナー」においてこれを導入しており、必ず入学直後に全員に学ぶ機会が与えられる点は重要である。しかしながら、当該科目では大学での学びの基本となるノートテイキング、レポート作成、プレゼンテーション等授業内容が多岐にわたり、時間の制約があることは否めない。この点を念頭に置いてジグソー法の中身を精査するとともに、事前事後学修を活用してより質の高い学びへとつなげていく必要があると考えている。

第二に、「歌子・実践検定」の導入について今回の試行ならびに2クラスで作成した多数の検定問題をもとに検討し、具体的な導入計画を詰めて行きたい。

これらとは別の次元で、自校教育の実施時期についても再考の必要性が感じられる。本学の創設の歴史を周知し、創設者の志を浸透させるという学祖教育は、1年次前期の「実践入門セミナー」のみで完結させるべきものではないのかもしれない。たとえば、例えば英語コミュニケーション学科専門科目として後期開講される「オーストラリア文化事情」では、オーストラリアの歴史に欠かせない人物であるイギリスのビクトリア女王紹介の際に、下田歌子がビクトリア女王に謁見したことを思い出させたり、欧米視察をテーマに授業レポートを課したりする形で、自校教育を発展的に行っている。また、言うまでもなく下田歌子の功績は、女性のキャリアプランニングに関わる授業や就職支援講座などでも取り上げやすいテーマとなりうるであろう。こうした認識を全学の教員が共有することにより、より効果的な自校教育が実現するはずである。

6. おわりに

以上、本稿では「実践入門セミナー」における自校教育について、その背景や経緯をふまえて各クラスでの取り組みを報告した。導入初年次に当たって、手探りで実施せざるを得なかった点は否めないが、両クラスにおいて確かな手応えと「伸びしろ」を感じることができた。今後も改善を加えることでより、より質の高い自校教育を行えるよう努力を重ねたい。

謝 辞

香川大学の山本珠美先生にはワークショップでの有意義なご教示を賜った上に、香川大学検定の貴重な資料をご送付いただいた。また、同大学の葛城浩一先生には、検定作成に至るご経験をお聞かせいただくとともに、貴重な冊子を複数ご提供いただいた。2名の先生方の存在がなければ、筆者らの取り組みが実現することはなかった。この場を借りて深謝申し上げたい。

注

- 1 筆者らは、2017年度は教育プロジェクトの一環で、2018年度以降はプロジェクト研究所実践女子大学セルフアセスメントツール研究所の研究事業として、授業への自己評価ルーブリックの開発と導入を行っている。特に全学で1年次を対象とする共通教育必修科目「実践入門セミナー」については、統一ルーブリックを作成して導入し、学科間比較を行いながら調整を図っている。
- 2 SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）による年次開催のフォーラムで、大学・高専の教職員が自らの能力開発のために役立つ多種多様な質の高いFD/SDプログラムならびに組織を超えた持続的な相互交流・関係づくりの場を提供している。
- 3 「香川大学検定」は、「香川大学検定をつくる！」と題する授業科目の中で受講生を中心として半期をかけて作成された雛型をもとに、その受講生の1人が所属する学生支援サークルメンバーと3名の教職員がプロジェクトを編成して10回程度のミーティングの下に完成したものである。また弘法大師空海をモチーフとしたキャラクターやお遍路さんに見立てた構成等、さまざまな工夫が凝らされている。詳細は河原ほか(2009)を参照されたい。
- 4 2018年度4月設立のプロジェクト研究所「実践女子大学セルフアセスメントツール開発研究所」においてルーブリックの開発を中心として学際的研究を進めている。自校教育を行う共通必修科目「実践入門セミナー」については、短期大学部2学科と生活科学部食生活科学科との間で共通のフォーマットを開発して調査を行い、結果の相互比較を重ねている。

引用文献

- 大塚みさ・三田薫・白尾美佳（2018）「自己省察を促すための自己評価ルーブリック導入の試み」『実践女子大学短期大学部紀要』39, p. 1-21.
- 河原勝浩・林晶子・葛城浩一（2009）「香川大学検定をつくる！：自校教育へのアプローチ」『香川大学教育研究』、第6号、p. 93-101.
- 葛城浩一・山本珠美・白山淳史・高橋愛美・山田友幸（2012）『「香川大学検定」を用いた自校教育の授業モデルの開発』『香川大学教育研究』、第9号、p. 153-165.
- 大学プレスセンター（2018）「学祖・下田歌子の想いを楽しく親しみやすく学ぶ自校教育—実践女子大学」大学プレスセンター、2018年7月掲載 <https://www.u-presscenter.jp/2018/07/post-39873.html>（2019年9月30日閲覧）
- 寺崎昌男（2009）「自校教育—それはなぜ重要か」『大学時報』58(328)、p. 30-35.
- 山本珠美（2012）「大学入門講座—夢に近づくためのキャンパス活用法—」葛城浩一 編『「香川大学検定」を用いた自校教育の実践記録』、p. 61-70.

資 料

- 原案 杉原萌、作画 牧野和子、監修 実践女子学園（2011）『きりうたこ』小学館スクウェア Web サイト「下田歌子小伝」
URL: https://www.jissen.ac.jp/school/shimoda_utako/biography/index.html（2019年9月30日閲覧）